白根町公民館報

編集発行人 清水節義
新潟県中蒲原郡
発行所 白根町公民館
印刷所 笹勇印刷所

青年に期待する

白根町公民館長 清水節義

緑のそよ風は一面の青田を渡つてくる。すがすがしい新緑に衣がえした町の街路樹も一きわ行人の目にしみる。鮮かな自然の更衣である。白根の外観は実に美しい。

×

六年八ヶ月の占領から日本が解放されたのもついこの間の事である。当時全く青年が社会から、かえり見られない野放しの状態にあつたわけである。

「近頃青年に知性の閃きが少く、ファイト（闘志）がなくなつた」と歎く声を耳にする。戦後一応は青年の組織が整備されて来たわけであるが、青年自身の自主性と組織自体の主体性の確立が少い現状である。青年組織はあく迄も、自ら求める自己研修の教育活動でなければならない。

徒らに他に依存し、援助を求めることのみに専念するようでは青年の誇りも失われるわけである。旧態依然たる組織の運営や活動では、現代社会から置き去りにされるのである。

青年団は社会教育の中核として、「村づくり」「町づくり」の一役を買わねばなるまい。お祭り青年団、盆おどり青年団、寄附強要青年団、興業青年団、等……に堕落してはおしまいである。脱皮、更衣の時ではなかろうか。

×

青年こそ地域社会の悪弊の打破にむかつて敢然と起ち上るべきである。曇りなき清新の目で自分達の周辺をながめるがよい。年少者の喫煙、酒のみ、とばく、頽廃文化へのあこがれ、集団暴行、選挙違反、等……。醜いものを余りにも多く見るのである。その排除にこそ青年団独自の運動でたゝかわれねばならぬ。

×

イギリスの成人教育協会のウイリアムズが「成人教育を説明することは極地の地図を描くように困難だ」といつている。

今日の社会教育に理論と大系を与えることは極めてむづかしいのである。

明日の日本が貧しいながらもどのような国として生長するのか、今日の複雑な世界情勢の下では誰れも明白に答えるものはない、時に二、三の学説が発表されても自慰的思弁に終つて世の中を動かす力に乏しい。

国家のなやみは、即ち青年のなやみである。徒らに結論を急ぐことは逆コースえの危険を多分にふくむのである。

戦前の天下り式、統制主義、動員形態に逆戻りしては、社会教育の民主化ははゞむことになる。青年の自主性と協力に基く活溌な運動でなければならない。

最近農村に急速に発展している若き青年の集い。四Hクラブの活動は実に目覚しいものがある、日常の生活と密着し、日々の向上と研修が直ちに身につくのである。将来の日本の新しい歴史の創造はこうした真剣なクラブ組織の中から盛り上るのではなかろうか。

風格のある町

淡 又三郎

街路樹のある町。川船ののぼる川。公園のある町。そして役場の屋上から展望される越後平野。その平野に遠く連なる山々飯豊、粟ヶ岳、守門。この六年前の第一印象は、いまもなほ鮮やかだ。

雨の川面、灯のうつつてゐる中ノ口川。一日か二日見ないともうこんなになつかしい流れ。殊に月夜の景観は、まことに美はしい。そしてこんなにも美しかつたかと、星空を仰いだのも橋の上であつた。

街路樹の根もとに、何気なく置かれた石には、苔が蒸してゐた。大通りから見える奥まつた玄関には、軸がかゝり、花が生けられてゐる。

この白根には、確に一つの風格がある。白根は商業都市としても伸びるだらう。生産都市としての将来性も多からう。味方の笹川邸を頭に浮べ、この風格のある町を考へると、観光都市としてもまた発展すべき素地を充分に持つてゐる。

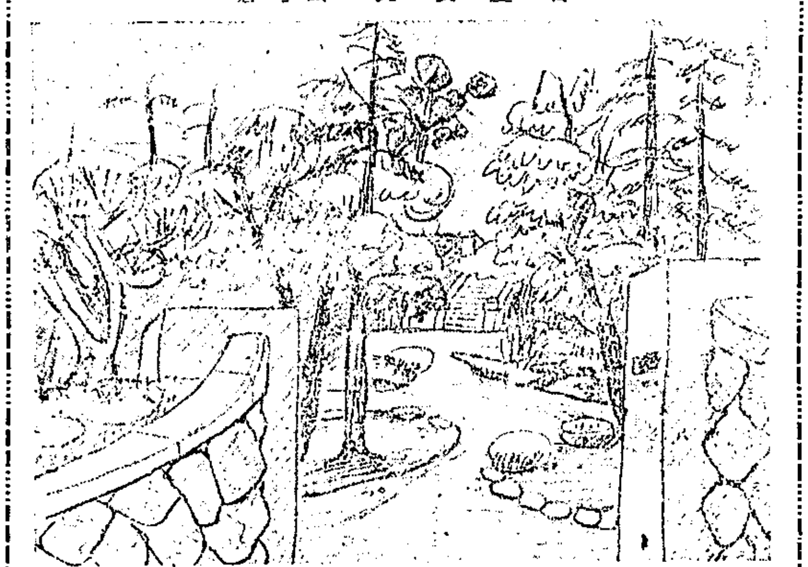
この白根へ汽車を降りると、誰しもが先づ土手に上るだらうが、その土手には木がない。風の関係もあるだらうし、堤防に植樹する事は法律が禁じてゐるのかもしれない。そして景観の上から言つても、橋と橋との間には、高い木は欲しくない。刈込んだ、手入れの届いた低い木が欲しい。生産的な木もあるのではないかと思ふ。こんな事を考へながら毎日流の面へ眼をやる。

心持ちの上の余裕と、経済上の余裕とが文化の基盤になる。同時に文化と云ふものは身近な処から育てゝ行かなければならないもののやうだ。長い歴史上の過去に於て、白根の人々が身近な処から育てゝ来たもの、それがいま白根の町の風格となつて残つてゐる事を忘れたくない。我々もまたその風格の上に、新しい風格を積み重ねて残さなければならないのだから。

（高等学校主任）

紙上デッサン展 ④

青穹会 関根慶吉



『浄水場の門』

浄水場のこの門には戦前まで鉄格子のモダンな扉がとりつけられていたのであるが、太平洋戦争がはげしくなつてこんなものまで供出されてしまい、その後木製の簡素な扉がとりつけられた。戦後この門にも「進駐軍の命により……」といかめしい立札が立てられたこともあつた。

この町に上水道が施設されて諏訪木南端のここが浄水場になり、当時ここに植えられた木木はまだ小さなものであつたが、今では見あげる程に高く伸びた松や、しいの木、ヒマラヤ杉などの木立がエキゾチックな感じをあたえる。

いつも清浄なわが白根町の浄水場は今白いつつじが満開である。潮露の芝生をふんでここの中の池のまわりを歩いたり、尺余の鯉に見とれてたたずむのも又一興である。（五、二八関根）

中蒲原郡略史 (4)

伊丹末雄

永正七年（一五〇一年）六月六日、上杉顕定の党槻吉（古志郡）城主長尾房景が、長尾為景の党と蔵王堂（古志郡）に戦つて勝ち、八条某・桃井某等が黒滝城（西蒲原郡）を守つた。そこで阿賀野川から南は三条・護摩堂のほかみな上杉顕定に属することになつた。（「新集古案」）

永正十年（一五一三年）八月三日、長尾為景が吉江景宗の功を賞して、蒲原郡の土地を与えた。（「国分寺文書」）（吉江景宗は西蒲原郡味方村吉江にいた。）当時はまだ中ノ口川が掘られていなかつたのであるし、吉江氏の領地は今の白根郷の一部分を含んでいたことと思われる。

永正十一年（一五一四年）十二月二十三日、長尾為景が大鑑鶴寺に菅名荘長井保安田条を自分が越後の守護職につくまで仮に与えた。（「上杉古文書」・「伊佐早文書」）

大永六年（一五二六年）、新津丹記入道永祐が長尾為景の下越出兵によつて降服した。（新津永祐は、新津市にいた人である。）

享禄三年（一五三〇年）一月二十一日、長尾為景の二男虎千代すなわち後の上杉謙信が生れた。謙信は成長して兄晴景のあとをついで春日山城主となり天文十八年越後を平定し、翌十九年二月守護上杉定実が死んで子がなかつたので、ついに国中の実権を握つた。以後次第に勢力を四方にのばし、永録四年十二月将軍足利義輝から関東管領に任ぜられ、天正六年三月十三日春日山城において歿した。

天文四年（一五三五年）六月上杉定憲（上杉定実の義弟）が蒲原郡に入つた。本庄房長・水原政家・色部勝長等が之を迎え味方を郡中に募つて援けた。十九日、政家が勝長の部将田中長義に答書して、勝長に蒲原津を守らせた。（「読史堂古文書」）

天文十一年（一五四二年）三条城主長尾俊景は為景の死後あとをついだ長男晴景を侮り、そむいて四方を侵略したが、これに応じた城将中に本郡の金津伊豆守祐高（金津村）・野本大膳（村松町）がいる。

天文十三年（一五四四年）十月十日、上杉定実が安田長秀の戦功を賞し、越後堀越（北蒲原郡）の半分、及び金津保下条村を与えた。（「安田文書」）

天文十九年（一五五〇年）三月、護摩堂城主平賀半七頼経が三条城の胎田常陸介景高を攻めて功があつた。

天文二十年（一五五一年）四月二十八日、上杉景虎（謙信）が大串某を越後の阿賀野川・信濃川・荒川三ヶ津の横目代官職とし、府内に在勤させた。（「藤巻文書」・「歴代古案」）。

天文二十三年（一五五四年）三月十八日、上杉景虎が普請のために越後に命令を下して役夫を募集した。（「上杉古文書」）

永録十一年（一五六八年）十月二十日、上杉輝虎（謙信）が村上城（岩船郡）の本庄繁長を攻めようとして春日山城を出発し、途中谷地の武将の参加を求め、栗林政頼を新潟に呼び寄せた。（「歴代古案」）この軍勢は本郡を通過したはずである。

永録年間上杉謙信が侍大将甘糟備後守清長に蒲原郡の地三万石を与え五泉城におらせた。（「北国太平記」等）また謙信の臣須田相模守義国（親光・親満とも書かれている）が須田村附近を領し、後須田に館を構えていた。長子右衛門尉光義は文禄三年罪あつて京都に幽居し、二男又太郎長義があとをついで大炊助と称し、父子三代ここにいたが、後慶長三年上杉氏が会津に移つた時従つて深川城主となつた。

天正二年（一五七四年）九月、上杉謙信が安田筑前守（北蒲原郡）の領分を検地した。（「安田検地帖」）その検地帖の中に、井口文三に与えられている「さゝほり」（「笹堀」）・田那部内匠助の「五十公野地くわ山」（「桑山」）・安辺源敏の「高山村」（「二百刈」）・直納の「子からみの瀬」（「小擢」）の地名が出ている。

この年上杉謙信は重臣直江山城守兼続に今の白根郷附近の水はきをよくするために中ノ口川を掘ることを命じたという。この工事は慶長二年までかかつてでき上つたが、巾二間であつたといわれている。

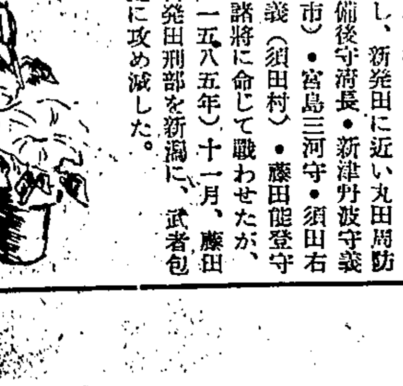
天正三年（一五七五年）十二月二十三日、上杉謙信が部下の将士八十余人を註記した中に、菅名源三の名が見える。（菅名村にいた人。）

天正六年（一五七八年）三月十三日、上杉謙信が春日山城に歿した。彼は生涯独身であつたので実子はなく、長尾政景の子景勝と北条氏康の子景虎を養子としたが、謙信が死ぬと重臣直江山城守兼続・本庄越前守繁長等が相談して、景虎があとをつぐならば北条氏が上杉家の領地をあわせてしまう心配があると考え、急に景勝を春日山の内城に迎えて後嗣とした。外城にいた景虎は大いに怒つてただちに内城を攻め、以来両方幾度か烈しく戦つたが、翌七年三月ついに景虎は景勝の兵に囲まれて自殺した。

天正七年（一五七九年）、上杉景勝と上杉景虎が戦つた時、本郡の雷城主丸田周防守は景虎方についてその兄大面（南蒲原郡）城主丸田伊豆守及び三条城主神余石見守、栃尾（古志郡）城主本荘清七郎忠長等と共に景勝に抵抗した。新発田城主新発田因幡守治長・赤谷（北蒲原郡）城主小田切三河守祐則等は景虎に味方して、祐則の弟治部少輔貞義・玄蕃允貞満及び津川城（東蒲原郡）の金上遠江守等は景虎に味方して赤谷城を攻めたけれども、勝てず、貞満は死に、貞義は逃げて雷城の周防守に頼つたが、五月渡辺弾正義員のために射殺されたという。

しかし当時の様子を書いたと思われる岩谷薬師堂（東蒲原郡三川村岩谷・平等寺内）の羽目板の題書によると、貞義・大蔵等は逆に景虎方の蘆名盛氏の命によつて雷城を攻めたようである。あるいははじめ景虎方に属し、後景勝を援けたのであろうか。あらたに資料が見出だされない限りははつきりさせることのできない問題である。

天正八年（一五八〇年）四月、上杉景勝が栃尾城の本荘秀勝を攻めた

菅名綱輔が加茂山（南蒲原郡）に陣して三条の神余親綱の兵をけん制した。二十二日栃尾城が陥落した。（「上杉年譜」・「内田文書」・「渡辺秀二氏所蔵文書」・「菅名文書」・「景勝一代略記」）

天正十年（一五八二年）、新発田城主新発田治長が上杉景勝にそむいたので、景勝は翌十一年（一五八三年）八月、みずから兵を率えてこれを攻めたが、城をおとせなかつたので軍を返し、新発田に近い丸田周防守・甘糟備後守清長・新津丹波守義門（新津市）・宮島三河守・須田右衛門尉光義（須田村）・藤田能登守信吉等の諸将に命じて戦わせたが、十三年（一五八五年）十一月、藤田信吉は新発田刑部を新潟に、武者包利を沼垂に攻め滅した。